



昭和女子大学学長

坂東真理子

Mariko Bando

学長という激務をこなしながら、『女性の品格』『親の品格』と次々にベストセラーを生み、メディアへの出演や講演活動も行う坂東真理子氏。その言葉は長年キャリア官僚として働きながら、留学や出産、子育てをした体験に裏打ちされて説得力がある。

少子高齢化の進展や経済停滞が続く中で、発展するほかのアジア諸国のエネルギーに圧倒されそうな日本。混迷する時代を生き抜くためのさまざまなヒントを坂東氏からいただいた。

「品格」

現代に求められる女性像を考える

——坂東眞理子先生といえは『女性の品格』という大ベストセラーがまず思い浮かびます。この本はどういうきっかけで執筆なさったのでしょうか。

坂東 ここ数年、以前にも増して女性の自立が叫ばれ、それと共に自分を抑え付けずもつと伸びやかに生きようという考え方が広がってきました。それはよいことです。自分らしくということ強調し過ぎて「主婦が恋心を抱いたら相手に告白してみましよう」などと安易な行動を唆す論調まで出てきたのを見て、当時PHP研究所の社長をされていた江口克彦さんに「女性がきちんとした人生を生きていくためには、自分の感情の

ということに発展して『親の品格』を書かれたわけですね。

坂東 そうなのです。『女性の品格』を書くときには、ちょうど昭和女子大学の学長になることが決まったところで、女子大ということもあって、ここでどういう女性を育てようとしているのか、自分の考えを整理しておかなければいけないと思っていました。特にこの大学は「良妻賢母を育てる」という目標を掲げて長年やってきました。しかし現代社会においては、もう女性たちが家庭の中だけで生きるのではなく、もつと社会の中で活躍してもらわねばなりません。しかしその活躍の仕方が男性と全く同じでよいのか、女性が社会で活躍するとはどういうことなのかという問題意識が常に私の中にはありました。

また、私自身公務員として三四年間働いてきて、男性に囲まれながら生きてきたわけです。その中には本場に立派でたくさんの方を学ばせていただいた男性もたくさんいらっしゃいましたが、逆に反面教師もたくさんいらして

(笑)、そうした経験もちゃんと伝えておきたいと思っていたのです。権力志向があまりにも強い方とか、組織のためには社会のルールを破ってもよいと思っている方もおられました。これからの女性にはそうはならないでほしいです。別の働き方もきつとあるはずだと思います。思いが強く、いろいろなことを書き込み過ぎたかと心配しましたが、意外とたくさんの方が読んでくださいました。

——読者の方々からは、共感もたくさん寄せられたのではないのでしょうか。

坂東 ありがたいことです。たくさんの方の働く女性たちが「自然体でいいですね」「気が楽になりました」と反響を下さって、とても嬉しかったですね。自分の女性らしさを活かして、自分が正しいと思うことをきちんとやればよいとあらためて思ってくださいようです。

——私は先生が女性たちに現実とは違う理想像を想定されて、「こうあってほしい」と思っていて書かれたこともたくさんあったのでは

ないかと考えておりましたが、読者の反応をうかがうと少し違ったということなのです。

坂東 あらためて感じたのは、日本の女性はとてもまじめなことだと思います。私自身も、自分だけが得をすればいい、自分だけが幸せになればいいというエゴイズムを追求し過ぎると、結局は自分も幸福にはなれないと考えています。それよりも自分が人の役に立つとか、自分がいることによって人をサポートできることが実はとても嬉しいことであるという心の持ち方を一番アピールしたかったんです。しかし実際には「ぜい肉をつけない」とか「礼状を書こう」「姿勢を正しくしよう」などという外から見える形の部分に反応された方も多くおられました。それでも読んでもらえるのは嬉しい。外見を整えることで中身もそれに従ってくるということがありますから。周りに好感を持ってもらえれば、それに対して自分もポジティブな反応ができるというよい循環につながるんですね。逆に私が若かったころ主流だった、内面を充実させればおのずと外見も立派に

なるという考え方は成果が見えにくい。形はすぐに整えることができるので効果が見えますが、内面を磨くのは時間がかかる。どちらか一方ではダメですが、外から入るといっても有効な方法であることを、若い人には伝えたいと思います。若い人は型通りにしようとか、マナーを身に付けようとか、ルールを守ろうと言うと反発することが多いと思います。他方、「オンラインワンの自分」「個性を發揮する」「創造性で勝負する」などということには反応がいい。

——でもそれはとても難しく、次元の高い問題ですね。

坂東 その通りで、未熟なうちは型通りに人のまねをすることも大切ですが、型を繰り返して本当にそれが身に付いたら、型には納まらなくなると、自分らしさがひとりで加わってきます。いきなり「私らしく」などとこだわると、人から鼻持ちならないやつだと思われてしまいます。私も若いころは自分らしさにとらわれていて無用の摩擦を引き起こした経験があり、今では深く反省しています(笑)。



挫折体験が努力や自信につながる

——最近の若い人と話をしますと、みんな同じマニュアルを読んでいるのではないかと思えるほど似たような反応が返ってくるがあります。こういう世代の能力をどのように引き出すべきか、迷うこともあるのですが。

坂東 若い人を見ておきますと、自分に自信がない人がとても多いですね。自分を好きになりにくい、自分を肯定できない。その理由は、逆説的なのですが、あまりにも大事に育てられてきて、嫌な思いや悔しい思い、情けない思いをせずに育ってきた



ばんどう・まりこ ● 1946年富山県生まれ。昭和女子大学学長。1969年東京大学卒業後、総理府入府。内閣広報室参事官、埼玉県副知事を経て、1998年に女性初の総領事（在オーストラリア連邦ブリスベン日本国領事館総領事）に就任。2001年内閣府初代男女共同参画局長。2003年退官。2004年以降は学校法人昭和女子大学教授、同大学女性文化研究所所長、同大学副学長を経て、2007年4月より現職。著書に『女性の品格』（PHP研究所）や『親の品格』（PHP研究所）『錆びない生き方』（講談社）など女性の生き方、社会の在り方に関する著書多数。

ている。だから挫折や失敗からはい上がった経験がない。私たちのころは平気で試験の成績順に学校の壁に名前を貼り出したりましたよね。個人情報も何もあったものじゃない。ただそれは悪いことばかりではありませんでした。自分の力不足に直面して頑張ろうと思ったり、自分にはこんな良い点があるからそれを伸ばそうと思ったり、いろいろと考えるきっかけになったと思うのです。今のようにならなくなってしまう。

——過保護なんですかね。
坂東 嫌なことはお母さんやお掃除の人など誰かがやってくれ。若者たちは仲間内の小さな世界では凄くいい子で、愛想もよく、お互いに気を使い合っているけれど、半径五メートルを離れた人に対しては無関心なんです。
——電車内で化粧をしたり、混んだ通勤通学列車内でモノを食べたりする若者もよく見掛けます。
坂東 外見を整えるということには、自分と直接関係のない人

からどう見られるかという気遣いも含まれるはずなのです。友人には気を使うけれど、知らない人はどうでもいいというのでは困ります。今海外留学をする若者が減っていることにもつながっています。危ない思いや嫌な思いをするよりは、安全で清潔な日本で暮らした方がいいと考える。私も留学経験がありますが、英語が通じないとか、差別されるなど情けない経験をするためにこそ、海外に行ったほうがいいと思っています。バカにする人がいる半面、支えてくれる人や親しくしてくれる人にも出会うわけで、そういう情に對するありがたさが身に染みるのも海外体験あればこそです。

かわいい子だからこそ手放す勇気を

——女性の場合、日本の社会ではまだ男性に伍していく上では大変ハードルの高い部分も多いと思います。今後管理職を目指すような女性に、何かアドバイスをいただけませんか。

——若い人を迎え入れる立場としては、あえて厳しくした方がいいのかもしれないね。
坂東 ええ、厳しくすべきだと思います。最初から何も教えずに権限移譲だけしてしまうのはかわいそうです。基礎的なマナーとか仕事の処理を行うなどのスキルを身に付けた上でないとダメですね。いきなり水の中に突っ込めば泳ぎを覚えるだろうという考え方は乱暴過ぎます。最初の段階で社会の厳しさを教えてやらないと、知らないままに年齢だけを重なることになります。私は大学の先生方にも、一年生の一学期が大事、努力できない子には落第点を付けてもいいとお願いしています。

坂東 女性だけでなく、周りの男性にも申し上げたいことがあります。男性優位の組織の中では男性の鍛え方は伝統的に伝わっています。しかし女性に対してはどう対応してよいのか分からず、気を使



い過ぎる部分があると思います。また、女性自身、気を使われていることに気付かないこともありがちです。女性は、自分が遠回しに注意されたとき、「私が男なら頭ごなしに怒鳴られていたかも」と拡大解釈するぐらいでよいと思いますよ。自らを厳しく見詰め、磨く心構えを持つてほしい。そうやって大きなチャンスの前に準備しておかないと、チャンスが来たときにつぶれてしまいます。そのうち、もう少し女性を厳しく評価する眼力を備えた男性が増えてくる

と思うのですが、現状はまだ甘いですね。
——長く働いていくためには、自分をきちんとチェックする目を持たなくてはなりませんね。また、人的ネットワークも大切ではないでしょうか。
坂東 仕事をする上でのネットワークとは、大親友を三人持つことではありません。そういう人がいることは人生における宝ですが、ビジネスではむしろ一〇人の緩やかな友達が大切なのです。自分の仕事上の知識やスキル、人脈や経

験の部分で助け合える友達。それが社会生活で一番有効だと思えます。同じ職場ではなく、外の人だとさらに世界が広がります。
——ここまで先生がおっしゃったことは、昭和女子大学ではどのように具体化されているのでしょうか。
坂東 学生には、今年から「夢を実現する七つの力を付けよう」とアピールしています。それは、
①グローバルな力
②英語を中心とした語学力
③IT活用力
④コミュニケーション力
⑤多面的に物事を考える力
⑥目標を掲げて行動する力
⑦自分を大切にする力
です。中でも自分を大切にする力を重視しています。自分の好きなことや自分を甘やかすことだけが自分を大切にするのではありません。自分で自分をおとしめるような行動をせず、自分に対して頑張ったねと言える行動を積み重ねることが自分を大事にすることなんだよ、と伝えていきたいと考えています。

——混迷する国際情勢の下で、
ますます日本の先行きは見えにくくなっています。こういう世界の中で私たちはどうあるべきでしょうか。
坂東 一人ひとりの日本人が、本当にグローバルに活動できるパワーやメンタリティーを持つことが一番大事ではないでしょうか。マーケットとして、あるいは生産工場としてのアジア経済を見るだけではなしに、信頼してパートナーを組めるだけの関係をアジアに張り巡らせるかどうか。今後は何事も日本だけで完結することはなくなるでしょう。そのためにも、「かわいい子には旅をさせよ」。子供をかわいいからと囲い込むのではなく、できれば中学・高校ぐらいから海外で暮らす体験をさせたいですね。かわいい子だから手放す。そんな勇気が親御さんにも求められていると思います。子供自身が生き抜いていく力、社会とつながっていく力を持つてるようにしていくことが、一番の「親の品格」だと思います。
——本当にそうですね。本日はどうもありがとうございました。